

医療機器分野で海外へ

松阪市大口町の三重化学工業(株)(山川大輔代表取締役社長)は今年で創業70年目を迎える。保冷剤の製造を開始してから60年になり、ゲル化と充填(じゅうてん)のノウハウを生かして、さまざまな社会課題の解決に取り組んできた。

保冷剤が課題解決に役立つ場面は、人間の暑さ対策から始まったが、人間以外の動物への応用も始まった。

2023(令和5)年から三重県立明野高等学校生産科学科の生徒たちと一緒に始めた取り組みは、母豚(ぼとん)肥育用



スノーパック(真ん中)やくまっとクール(左下)などの製品

三重化学工業株式会社(大口町)

多様性と共創を追究する



の子豚を産む雌豚の産前産後の暑さ対策に活用しよう、と、大型保冷剤の開発と、豚舎での実際の効果の検証実験に取り組んでいる。

22(同4)年2月に完成した新本社内のオープンイノベーションスペース「ミエラボ」では、働き方の多様性と共創

(コクリエーション)を追究しており、明野高校との取り組みにもミエラボを活用した。同社が医療機器分野に進出したのは05(平成17)年から。大学病院など医療現場との連携によって「ニーズ解決型」のものづくりに注力するなど、数多くの産学連携事業を進め

てきた。

シンガポールで昨年開かれたメディカル・フェア・アジアの三重化学工業ブース



会社 Memo

1956(昭和31)年創業。作業用手袋、保冷剤、医療機器、フェムテック商品などを製造販売。経産省の「地域未来牽引企業」・「三重のおもてなし経営企業選」などに選定されている。

山川社長(47)は「医療現場の課題は海外も同様で、海外企業からの受託による開発や生産も増加しています」と言い、「多様な組織・人材との共創で、世界中の医療現場や生活環境での課題解決に果敢に取り組んでいきたい」と意気込む。

医療機器分野での課題解決の一環として22(令和4)年には、市内に製造拠点を置く医療機器メーカー6社で連携・共創チーム「松阪メディカルメンバーズ(MMM)」を立ち上げた。連携することでスピード感を持った企画開発が可能となり、個々の技術を組み合わせることで新製品開発や新規顧客開拓にもつながると考えたからだ。